

初夏

^{せい}生のなまなましい手触りは薄れているのに
その重量だけが僕を包んでいるのは
午前の陽光にさんざめく湖面のたゆたいの^{わざ}技か

あらゆる事象が無価値であり、同時に
あらゆる事物が僕と同類であると感じるのは
花を落とした薄緑の木々がたてるざわめきの故か

何ひとつ言葉で語ることのできぬバラッドは
日々の暮らしの、ずっと向こうから
グレーの扉を目の前にした僕の足下へと沁み込んでゆく

これまでの時間
これからの時間
その隔たりは消え、等価となる——

それなのに未だに僕は、陳腐であるか、それとも
ひらひらとした薄っぺらな意味しか持たないか——
そんなちっぽけな差異の周りをうろうろと歩き回る

哀しみのひと欠片も無く、穏やかな午後であっても
そよそよとした風に、胸の痛みをおぼえる——
おそらくは、これこそがあらゆる生そのものの宿命なのだ

理知的な遊戯が織り成す自由な旋律の中にさえ
ちやっかりと潜み込む^{かげ}陰影たちのように
それは、なくてはならぬものなのに違いない

僕は手をかざす——

すると、何者かがその掌を通り抜けてゆく
ああ、この身を蝕みつつある、死臭にも似た毒素が何だろう

ついさっきまで想い描いていた惨めな自画像こそが
この世界を覆い尽くし、虚ろな笑いをばら撒いている瘴気——
その存在を映し出している鏡そのものじゃないか

元来、測定されるものに過ぎなかった数量——
その数量自体が自在に集合、変容することによって
自ら存在を誇示し、世界を支配する

タン、ドゥン、タン、ドゥン
自慰に過ぎない舞曲は溢れるほど提供される
そのことによってのみ人類は退化してゆく

地上を覆いつくした創造物——
永遠と未来を約束されていたはずのそれらは
早くも疲弊し、色褪せ、黒黴菌糸の進入を許している

食い破られた蛹から這い出る偽善の手足
どうしてこんな詩^{うた}をうたわねばならないのか
どうして僕はいつもこうなんだ

しかし、雲よ、許したまえ
お前の居る、抜けるような青い空とは対極にある——
光の届かぬ深海の奥底にも生命は宿っている

破壊という名の創造が許されているならば
この僕には、破壊された欠片を拾い集め
再生することを許せ

手をかざす——

傷つき、疲れた細胞の奥から

滲み、盛り上がる涙に影を落とすため

芽吹き出された若葉たちを透かせる陽光と

それをざわめかせる東寄りの風は

たゆたう時間が僕の許へ立ち寄ることを許す

生のなまなましい手触りはもう消えかけている——

けれども、その代わりに涼しく頬を撫でる風が僕の中を通り過ぎ

同化された大気として包まれている——

そのような生の肌触りが確かとなってゆく

(2009. 9. 12)